

〔はじめに〕

このレポートは1993年暮れ、クマ猟を得意とする秋田県K町に住むS氏に取材しました。当時の会報に掲載したものを、今回(2018)、整理し直したものです。当時の記録によると、彼は「ツキノワグマ」の単独猟で仕留めた数(有害駆除も含む)、過去10年間で約43~48頭になる、と、S氏の猟友が述べていました。グループ猟ではないからこれは驚かされました。

1993年10月20日までS氏は健康状態が優れず入院をし、最初の取材を終えたこの年の12月29日に再び入院しました。そのとき、S氏は病院から、ハナ(勝平の花姫)が心配なので暫く預かって貰えないか?という電話がありました。我が家から20~30分の距離でもあり、仔犬を引き取りに行きました。(写真参照)以後、翌年も何度か、その繰り返しが始まりました。

第1回の取材は1993年12月15日の午後でした。

↓1990年頃のS氏宅近くの周辺は「クマが出てくる猟場」でもある。



この日は朝から雪が降り出し、正午頃には15~25cmの積雪で時折吹雪の中を、S氏宅へ向かった。午後2時頃到着すると、先ず仔犬が出迎えてくれた。早速、暖かい手製の薪ストーブを囲みながら会談に入りました。迫力のある秋田弁が飛び出したが、分かった振りをして聞き流し時間の経つのも忘れ、気がついたらもう暗く6時過ぎになっていました。以後、翌年の秋頃まで、原稿にまとめながら何度か確かめつつ取材することができました。

〔目的〕

レポートの目的の一つは、狩猟という協働作業を通して、人と縄文柴犬がどう関わるのかを少しでも掴みたいという考えです。当時から、このテーマは頭から離れません。二つ目は、仔犬の育て方考え方などが、狩猟犬としてどんな役割・影響を果たすのだろうか?その意味で、何か特別な「訓練」があったのだろうか?というテーマです。

取材は、録音(アナログ)という方法で、私がS氏に質問し、話題が逸れても自由に話していただくという方法でした。私の理解する上での最大の問題は、秋田弁がよく分からない点があります。また「狩猟」についてどんな質問が適切なのか?という問題について、大曲市内のベテラン狩猟家からの協力を得て情報集めもしました。秋田県立図書館にもお世話になりました。お陰様で、東北地方の狩猟・マタギなど様々な分野を学ぶ機会に恵まれました。

私は小学生の頃からの中耳炎や腫瘍が原因で何度も手術を繰り返し難聴となりました。30年も暮らしているながら秋田弁の発音が良く聞き分けられないのです。何度かテープを回し、大事な箇所は本人に確かめるとか、地元の方に方言など教えていただきながら何とかまとめましたが、不十分な点をお詫び申し上げます。

1. S氏との出会いと縄文柴犬

1990年の秋、私を訪ねてきた際に、縄文柴犬「中仙の藤丸号—中仙伊藤（岩田の紅中×白鶴女・1990年7月19日生）」を紹介し飼育する事になりました。それから、彼は柴犬研究会（JSRCの前身）の存在を知ることになりました。当時、S氏はこの仔犬を含めて3頭飼育していました。先輩犬は北海道犬と柴犬の雑種で、その写真を大切にしておられ見せていただきました。仕事や猟のことに夢中で柴犬研究会の事は考えた事がなかった、と当時を振り返ってくれました。地元で鉄工所を経営している事もあって、クマの出没となれば当局から有害獣駆除として出動要請があり、その都度、犬たちの働きで、いち早くクマを追跡し発見しました。やがて、縄文柴犬（中仙の藤丸）1頭だけの方が無駄の少ない行動が取れると、S氏は考えるようになりました。その結果、この3年ほどの間に、縄文柴犬の活躍で仕留めたクマだけの数値は8頭になるそうです。クマ以外の狩猟対象は「ヤマドリ」「ウサギ」が主であって、その他の獲物は殆どやらないと語っておりました。

〔中仙の藤丸の壮烈な死〕

この縄文柴犬「中仙の藤丸」の死は、協和町の林檎園に出没したクマを追い、その時の不運で頭部に大怪我を負い手当ての甲斐なく逝ってしまったと、S氏の猟友たちが話してくれました。その時の二人の話の様子を整理すると、犬が普段と違う、大騒ぎの鳴き声なので猟友と二人で近づいた。時間にして15分くらい経過してからだと言う。10~15分まで接近しクマは当然仕留めた。しかし、何となく様子を変だ。それまで、クマを仕留めるのに夢中だったが、注意するとどうした訳か？既にグッタリしている縄文柴犬に気がついた。注意して、辺りを観察するとS氏たちが近づくまでの時間、クマは林檎の木に登っていた形跡があった。つまり、犬はクマを林檎の木に追い上げたのだろうか？しかし、その林檎の木は高さが無い。ジャンプして届く範囲だったのだろうか、と推測する。クマは、余りにも接近し、真下にいる犬に対して反撃したのではないかと分析してくれた。これは、状況からの推測であり確かな事ではない。この「中仙の藤丸」が死んでから気がついたのだが、彼は体重100kg以上ある熊の舌を噛み千切っていて、それが口の中に数cm残っていたそうだ。とても信じられない光景です。それを確認したのは、やや遅れて近隣の人達が5~6名（クマを引き出すのに応援に来た人達）目撃していた中での出来事であるだけに、この犬が残してくれた強烈な思いは尽きないのだと私には感じられたのです。その時一緒にいたS氏の猟友は、とても熱っぽく手足を使ってリアルに話してくれた事も、私には大変印象に残りました。

こうして、中仙の藤丸の壮烈な最期は、S氏の胸の中に消えていなかったことが、その後のレポートから想像されるのです。その強烈な思い出があるからこそ犬を残したい、そのために「作出」にチャレンジしてみよう、と、思い立ったのであろう。一頭や二頭の優れた犬自慢をしても、それはその時の自己満足でしかない、後世には残らない。そうした考えに到達するには、長い闘病生活があったからです。寝ながら「犬」の事を考え、そうして得た結論なのであると言う意味を、熱っぽく語ってくれたのです。

1993年当時の狩猟関連取材録音のテープ・120分×5本とも健全な状態で残ってありました。↓



↑ 中仙の藤丸号—中仙伊藤（岩田の紅中×白鶴女
・1990年7月19日生）

12月15日には、既に犬舎の設計図も完了し、すぐにでも工事が出来る状況になっていました。S氏が退院した2日後の10月20日22日に、雌の仔犬を世話してくれと頼まれた。私は、候補の犬を二頭選り出し彼に決めて貰うことにした。その仔犬は、「勝平の花姫号—新屋（筑波の太郎×福の夏桜・1993年7月22日生）」でした。この仔犬の母親は、「綱渡りや木登り（会誌の表紙）」をする事でマスコミなどにも扱われ当時は有名になっていました。その犬が産んだ2胎目となる。本題に入る前に、仔犬の感想を一寸だけ聞いたら、目を細めながら「気性がいい！」と即座に答えてくれた。早速、仔犬の育て方を聞く事にしました。

2. 仔犬の育て方—飼育環境

「勝平の花姫号」は、5ヶ月(1993.12/15現在)になろうとしていました。やや細目ですが良く引き締まった体型は実に見事で、軽快に室内を動き回っていました。首輪が付いているものの放し飼いであって、普段は、自由に外と室内を出入りします。どんな具合になっているのか聞くと、居間のテレビ台の下に約30cmの空間があって、その奥の壁が巾15cm高さ25cm位の切り欠きになっていました。外との出入りには弱いバネ仕掛けの扉が付いていて、犬が頭で押すと簡単に開けられる仕掛けとなっていました。この方法だと、犬の都合で、出入りする事が出来ます。まさに、合理的な飼い主と犬が住居空間は共同になっていました。

〔仔犬期は、寝食を共にする〕

従って、犬との同居と言う事になれば、寝食を共にすることです。その点を聞いてみると、『同じ布団に寝る事が多い』と答えてくれました。一緒に寝ていても、暑くなれば犬は勝手に出て布団の上に居る事もあるそうです。

そして、食餌はS氏が食べるものと同じ、と言うのが原則だそうです。失礼とは思ったが、どんな物を犬に食べさせているのか具体的に聞く事にしました。例えば、魚と野菜の煮物を作った時など、全く同じ内容をご飯の上に盛りつけるのだそうです。一緒に食べながらの会話があって、S氏の与えるものを犬が食べる。犬はもっと食べたくて「要求」しないのか？と言う質問には、最初の頃はともかくその都度言い聞かせているのだそうです。時間の経過と共に、だんだん静かに待つ様になるそうです。原則として「小食」であり、内容も「粗食」にしています。その訳を聞くと、S氏と一緒にいる時は、日常のあらゆる行動や言葉に対して敏感に反応する接し方になる、と答えてくれました。この事は、一般的に満腹の状態ではないので「可愛そう」とか、痩せていて虐待ではないのかとの評論もあるようです。しかし、全く反対の考えもある。この食餌の問題は、大変奥の深い内容が含まれていますので、ここでは、「健康」問題を除外して、「精神」的な分野についての一端として触れる事にしました。

〔良くない美食〕

一般的に「濃厚な美食」であればあるほど、反応は鈍くなり我が儘になって、飼い主の言葉に注目する度合いが弱くなる傾向があるようです。良く、狩猟犬と言うので犬を見ると、多少は肥満気味にしているのを見かけます。そうした犬は、その体型に慣れてしまっているのです。飼い主は気が付かないが、「充分」な動きとならないようです。肥満気味の犬が、山中で走る状況と言うのは、動きが重く足音が聞こえるほどです。化学食品と言ったような食べ物の「臭い」は、山野の野生動物には違和感があって警戒されることにもなります。自然に溶け込める体臭と言う問題にも気を配るのです。因みにタバコの臭いは良くないが、酒の臭いは蜂蜜などとも共通で、熊にあまり嫌われていない、とS氏の経験から説明がありました。

↓勝平の花姫号—新屋（筑波の太郎×福の夏桜・1993年7月22日生）
飼い主が入院し、迎えに行ったとき



〔拾い食いをさせない〕

仔犬の時期、食べ物について特に注意することは、外に出た時の「拾い食い」だと応えておりました。拾い食いをしそうになったら、その場で叱る。叱る方法は様々ですが、例えば、少し距離があった時は手近の小石を拾い、仔犬に目掛け投げつけます。小石が仔犬に当たってキャンと泣くが、飼い主が投げたと思わない工夫が必要だと応えていただきました。一度でも痛く嫌な思いがあれば、仮に投げた小石が当たらなくても、拾い食いすると小石が飛んでくる！と学習するようになります、と。

〔しつけには注意〕

一般的に、仔犬の「しつけ」として様々な情報や伝えられている内容があります。その例では、「持ってこい・待て・よし・など・・・」が強調され過ぎて、所謂「仔犬の育て方」について殆ど、犬の「判断能力（自覚）？」が失われた結果につながります。S氏は「飼い主が命令すれば、確かに従った行動もします。立派に狩猟犬としての役目も果たします。しかし、そうした育て方の結果は、山野で狩猟する時の主人と犬の連携に伴う、状況判断とか応用問題の解決の必要に迫られた時、犬の自主的判断の行動が少ないというのです。それは犬との気持ち、充分に通じないからです」と言うのです。「常に飼い主の“命令”に従った、服従の行動になってしまいます」と、熱っぽく語りました。

〔犬と協働〕

更にS氏は語ります。「山野で、ヤマドリなのかウサギなのかクマなのか、犬の側で判断する事が良くあります。そのような時には、追跡する犬の動作を見て判断します」。つまり、犬が主導でS氏が教えてもらうのです。獲物が射程距離になった事も、犬が教えるからです。こうした複雑な協働関係は「心服」とか「威服」の延長線上にある行動の説明とは、いささか違う事にもなります。狩猟現場に於いて、縄文柴犬の側がS氏に送る合図など、その状況によって銃に装填する「目的の弾の種類」を準備する事になります。

〔追跡〕

また、クマを追跡しその足跡で方向を判断し、縄文柴犬に追跡を任せる場合があります。その場合の縄文柴犬はゆっくりと行動しますが、その動作で大丈夫だと判れば、S氏は車を停めてある場所まで急いで戻ります。従って、縄文柴犬とS氏とは別行動での追跡となります。尾根を越え、次の沢に入ります。それを1・2度繰り返して、また次の尾根に出ます。その場所を的確に読み取り、車で先回りして待ち構える事になるというのです。この説明を文字にするのは大変複雑です。例えば、地形は勿論だが、その山野の茂みの手入れをした具合とか、周辺の木々の成長の状況、或いは植林した地域とか、20～30年育った林とか・・・その山野を熟知している事と、日常的な散歩のエリア付近であるからこそその判断でしょう。S氏が待ち構える場所は、口笛で犬に信号を送ると言う手段があるのです。クマの逃走経路についても、そうした周辺の状況を利用した一定のパターンがあるようです。つまり、クマの習性を利用した縄文柴犬との協働による判断があるようです。この先の狩猟技術の分野は、本稿の目的ではないので、別の機会に内容を扱ってみたいと思います。

〔しつこくしない〕

以上は、聞き取りをした一例なのですが、こうした様々な状況によって縄文柴犬が判断する事と、S氏が判断する事が、どこまで協働として可能なのかと言う、この先の未知の分野があります。S氏の話す「応用問題」とは、人も犬も一方的な意思ではない、と言う意味になります。

所謂、仔犬の時期に「しつけ」と言う考え方では無理をしない、つまり、絶対に「しつこく」接しない事が肝要だと思います。むしろ、飼い主の側が、仔犬を観て、その犬の性質？について学習することが大切だと言っ

てると思います。

その訳は、規格化された機械部品と言った様な分野と違って、仔犬であろうとも決して一律に同じではありません。それぞれに「特徴」があります。生まれ育った環境などの「刺激」による、その結果としてある程度の性質が備わっています。そうした素質を見失わないために、仔犬の行動を出来るだけ「観察」する条件を持って、暮らす事が大事なのです。家族の一員である、と言う事はそうした考え方が必要なではありませんか。

〔音や火薬の匂いに馴らすとは〕

良く言う、仔犬を銃の「音に馴らす」と言う問題をどうするのか？と聞くと、彼は即座に、仕事が鉄工所だからと、答えてくれました。日常的に、ハンマーの音やサンダー（鉄を削る）の音、大きな鉄板を倒した時の音などがあります。そうした日常生活に安心すれば、つまり、仔犬から観て信頼する様になれば大丈夫なんですと、自信を持っていました。しかし、いくら大丈夫だと思っても、一応は射撃場で様子を観ることにしています。最初の1～2日は駐車場で、銃の音を聞かせます。この時に、既に猟場に行っても活躍出来るかどうかの判断がされます。

S氏の場合、この射撃場へ連れて行く目的は銃の音に馴らすだけではありません。射撃を終えたばかりの空薬莢と一緒に遊びます。4～8ヶ月位まで、暇さえあれば射撃場に出掛けます。そして、火薬の臭いに馴れてもらう目的で、空薬莢での遊びを重要視すると語っておりました。この火薬の臭いについての問題は、やがて猟場でも重要な成果となって現れます。

3. 犬との協同暮らし

S氏がこれまでに飼育した犬種は、子供の頃の雑種、その後セッター、ポインター、北海道犬、それに日保系の柴犬が4頭になります。この日保系柴犬は熊谷から2頭・岩手から2頭などで、その他に北海道犬と日保系柴犬の雑種などを含めると合計で十数頭になります。それとは別に、縄文柴犬の「中仙の藤丸号」と今回の「勝平の花姫号」と言うことになります。彼の経験では、どんな犬を選ぶのか？その基準は何かを聞いてみました。

第1に、この辺では（秋田県仙北地方）昔から小型犬を優先にして考える。その訳については、犬の食餌量が少ないからで、小食であれば身軽であると言う単純明解な答えでした。昔からこの辺りでは、人と同じ内容のものを食べさせていたので、量的な事が問題になります。昔の人達が犬は身軽である事情には、猟場まで犬を抱き、背負子に入れたりして現場まで連れて行ったそうです。そして、ある程度食べれば2日でも3日でも食わずに行動するような素質が、小型犬にはあったと彼の先輩たちから聞かされた、と語りました。

小型犬での事情には、これとは別にもう一つの理由もあるようだ。それは、仮にクマに蹴られ飛ばされても身軽だから大怪我をしないのだと言う。だから、そうした犬を理想として求めていました。

第2は、犬が勝手にクマと闘争するようでは失格です。闘争するのではなく、必要に応じて恐がり警戒してくれる方が良いのです。その点で、これまで飼育した犬の中では「中仙の藤丸」が最高だったと褒めていました。



↑仕留めた 100kg 以上のツキノワグマ

見た目に良くない印象だが、体重測定にチェーンブロックを使用した。

（この写真は、僅かに残されていた中の一枚。）

以前には額の大きな犬がいい、と言うので日保系の柴犬を使ってみたが3頭は全く駄目でした。日保系の犬では10年程前(1980年代)の「松王号」は良くやった。北海道犬がクマにいいからと薦められたので使ってみました。しかし、すぐに鬭争してクマに殺られるから猟にはならなかったのです。北海道犬と柴犬を交配した犬なら良いかと思って試した事もありましたが、余り良くなかった。また、洋犬(元々が輸入された犬種の意味)の場合はクマを見ると怖がって逃げ出すから駄目でした。怖がるのはいいが逃げ出す・・・、クマ以外の猟ならいいのかわれませんが・・・。

第3に、所謂「シャイ」についての問題がある。彼の場合はただ一点だけ、音に順応する犬なら基本的に、狩猟犬として活躍するには問題がない、と話しておりました。このシャイと言う概念については個人差がある様です。

少々横道にそれますが、私の考えを含めて触れておこうと思います。このシャイと言う一般的な概念は、内気・はにかみ屋との意味で使われている。所謂犬の世界の展覧会などで、尾を下げると、飼い主以外の人が居た場合に「平静さに欠ける」とか「臆病」とか言う言葉になるようです。

狩猟をする犬の場合は「ガン=シャイ」とも言う様です。従って、この定義には極めて独善的で曖昧な問題があって、具体的な客観的理解になると、それぞれには相当な開きのある解釈になります。犬がシャイかどうか?と言う問題の基本には、仔犬が生まれた「環境」と成長する過程の「学習」「条件」によって左右されると考えています。

ここで言う「環境」とは①親犬の状態と出産条件(場所など)がある。②親犬や生まれた仔犬と飼い主との関係などが、考えられる。但し、先天的に疾患のある場合は別で、例えば、心臓や胃腸、視力疾患などは環境からの刺激との関係に問題が生ずるようです。尚、この件に多少の関連もあるので、後述では「能力?」と言う分野でも触れる事にします。

S氏がまだ子供時代には雑種犬を飼っていました。幼児→少年期の遊びを通して関わり、所謂「しつけ」と言う概念がありませんでした。彼の言葉と話題内容には、常に犬と一緒に暮らす共同生活の関係になります。前述でも触れましたが、犬と一緒に暮らすためには、人間の住まいの事情で犬が自由に行動するための「出入口」が必要になります。犬専用の出入口を設けることは、彼にとっては子供時代の延長線になるようです。

S氏の特別な「しつけ」については前述でも触れたが、それを敢えて挙げるなら「火薬の臭い」と「銃」の音慣しを重視するようです。住居の近くが既に山野であり、散歩ができる。日常的に猟場は散歩コースです。準備万端、明日は猟場に行くという計画がある訳ではないのです。言葉を変えれば、日常的な暮らしの場所がそのまま猟場であるという条件になります。だから、それはS氏には「しつけ」ではないという理解になります。

例えば、日常の犬との暮らしに「持ってこい」と言う会話があるのです。射撃場での遊びもあるので、猟場で獲物を持って来ると言う言葉の意識はないのです。犬の気性などで様々ですが「中仙の藤丸」の場合ヤマドリを仕留めた最初の時、獲物をくわえて5~6kmくらいの距離を自宅まで帰ってしまいました。1~2度「持ってこい」と叫んだが他に気をとられている間に居なくなっていました。

辺りを見回してみると、遙か先方に獲物をくわえて帰って行くのを見届けました。途中、川巾の広い所もあるのに、それも泳ぎ渡って帰っていたというのです。獲物は多少汚れており、噛んであったようです。S氏が自宅に戻るまでには相当な時間が経っていましたが、ヤマドリは寝部屋の中に置いてあったそうです。敢えて取り上げる必要はないので、彼はいつもより少な目の食餌を与えながら、犬の目の前でヤマドリの内臓(腸)を取り出して、御褒美の意味で与えました。この過程には、自然体で無理が無く、生活の流れそのままなのです。

次の機会(猟)でも、獲物をくわえてなかなか放さない状態だった、と話しておりました。しかし、わざとその事を無視し、S氏は別な行動に移ります。その間、5~6分くらいの時間を与えるのだそうです。仮に「持ってこい」の会話で、手元に運んできて、犬が獲物をくわえている状態で取り上げてはいけないそうです。持って来た事を褒めたたえると、くわえていた「物」を自然に放す。そうした余裕が、飼い主には求められると話しておりました。

自然に、それまでくわえていた獲物を放してから、ゆっくりと拾い、犬に見せながら解体し、その一部を御褒美として「褒めたたえ」ながら与えます。多少の個体差はあるが基本的に、そうした繰り返しの機会が 2~3 度あれば大丈夫だと話していただきました。次からは自然に持ってくるようになるものだ! と確信を持って答えていました。こうした現象は、どの犬種でも多少の違いはあるものの、同じような行動になるようです。

狩猟犬は特別な犬だからとして、「持って来い」と言う命令を与え従わせます。そのためには運搬と言う「芸」を繰り返し訓練する、と言うのがこれまでの一般的な解説でした。また、これを威服とか心服と言う言葉で、成る程と言うような説明もされていました。しかし、この稿ではそうした考えは無いのです。つまり、犬に命令して、それに従わせると言う考え方は、ここではありません。

S 氏の場合、最初の方は獲物をくわえて犬は勝手に自宅へ帰ってしまった。2 度目は、褒めたたえて犬の気を逸らしながら解体し獲物を分け合った、と言うプロセスには、命令や服従と言った考えはありませんでした。つまり、少なくとも縄文柴犬の場合「運搬」と言う、特別な訓練をする必要はない! と、言うのです。くわえて運べる「物」ならば、この説明でも理解が出来ますが、ツキノワグマの場合はどうするのか? と質問をした。

彼は即座に、撃って命中した箇所から出血しているの
で犬はその箇所を舐めている、と言う答えが返ってきました。片手で持てる重量ではないので、その場で解体して犬と分配する事もできません。従って、しばらくはその場に止まる状態が続くのです。仕留めたクマを解体するには自宅まで運ぶしかありません。それには、場所の条件にもよりますが、殆どの場合は、いかなる悪路でも道路まで引き出す作業があります。犬が運搬できる筈もないのです。従って、何人かの応援を依頼する事になります。その間、犬はクマの所で、結果的には待つ事になります。

↓クマを仕留め、運び出すために、応援に来てくれた仲間との貴重な写真です。(写真は加工してあります。)



これを、過大な美談とする場合「犬は飼い主が戻るまで、誰も寄せつけずに獲物の番をする」という解釈が生まれます。

縄文柴犬がクマを追跡すると言うのは、どんな行動をするのか? と核心部分の質問をしました。S 氏が見ている「焦れたい程ゆっくりと」歩く程度に追跡する、と話し始めました。右へ行ったり左に回ったりしながら、徐々に臭いを確かめながら行動する。但し、季節によって多少の差があると言う。勇猛盛んに、敏捷に追い詰めるとのイメージを持ってましたが、私の考えとは全く違った答えでした。警戒しながら、恐々と行動すると言うようにも聞き取れたました。

最初の方に、犬がくわえた獲物をすぐに取り上げようとするから、次も「取られる」と言う考えにつながるのではないだろうか。これでは犬との信頼関係のマナーに反することになります。犬は「取られる?」と思うのか、くわえたまま離さない。それを無理に、従わせると言うところが、信頼関係に疑問が残るしこれでは犬の自主判断? が弱くなります。縄文柴犬の持つ本能的な状態で「学習」する事にならない、と言う話を秋田弁で熱っぽく繰り返し繰り返し語ってくれました。一般的に、犬の分野では「しつけ」と言う概念が、「命令」とか「強制」が背景のもとに存在します。肝心な点の「信頼関係」が基本とする、協働の暮らしについては説明が不十分です。

また一方では、狩猟犬と言う特別なイメージを強調する中に、「猟欲」と言う言葉があります。「犬は猟欲がなければ駄目だ」と言うのです。しかし、これは大変に奇妙な話で、犬と人間の関わりが無視され、結果だけの考えになってしまっています。そして、訓練だと称して、悪臭の中でウズラだ、ヒヨコだと犬に襲わせ嘔ませて

います。その要求に対して犬が反応しなければ、それは駄目だ！猟欲が無いと言う判断です。その結果の犬の反応によって、猟欲があるとか無いとか人は判断している訳です。

S氏の考えとは対照的に、一般的には人間の要求が先にあって、犬の側の本能？や能力が無視されています。従って、この場合は犬に対して常に強制が必要になり、威服とか服従がなければ、辻褃が合わない論法になっています。

こうした関連に、「10羽捕る」犬と「1羽捕る」個体犬の差が「猟能」が良いと論じられる事があります。この考えはS氏とは全く違った次元の問題になります。それは、普段からの環境や、目的（獲物）に対する情報・状況の把握があるからです。日常的に猟場を散歩していれば、何処にどんな獲物がいるか？と言う自然や物理的環境に対する情報を、無理することなく犬と共有することになります。

S氏の場合は、日常の知識に集約され、例えば、相当に細かな地形や木々の状況まで、或いは、季節による天候や、その日の風向きまでが手にとる様に理解されていました。そうした日常の情報に対して、犬と共にどれだけ溶け込んでいるのか？と言う適応・順応の問題があります。縄文柴犬の場合、日常の「刺激」と学習の度合いにより、それぞれの個体が持つ能力差として現れる事になるだろうと考えられます。

つまり、飼い主はどれだけ犬に自然環境や物理的環境について、学習する機会を与えていたのか？と言う問題が基本的には問われるのではないだろうか。私は話を聞いていて大変良く理解出来ました。

4. 能力差は遺伝するのか？

縄文柴犬が持つ能力差、と言う点は大変に難しい、それぞれの立場で見方が変わるようで、色々と奥の深い意味があると思います。ここでは、日常の暮らしの上で、必要上「猟犬」と言うテーマで述べます。所謂、一般的にいう「家庭犬」でも、内容は全く同じだと考えます。つまり、ここでいう猟場は、普段の家庭環境に置き換え目的を変えれば、全く同じ考え方が成り立ちます。しかし、この問題はもっと別な角度でも触れておかなければなりません。

第1に、縄文柴犬の能力差は遺伝するのだろうか？という問題があります。私は1988~1992年ころ、以下の様な実験を試みたことがあります。ある縄文柴犬の個体Aは与えられた条件の行動に対して、見事に解決するが、別の縄文柴犬・個体BにはAと同じ条件でも解決出来ない、と言う問題について検討してみました。

生後50日~60日令の仔犬たちの行動は、非常に活発となりその行動範囲を限定するのはとても難しいころです。個体Aを、流れのある小川（巾30cm）を渡らせるのに成功すれば、2回目は躊躇する事なく渡ります。個体Bは全く同じ小川を渡るのに失敗するように仕向けるのです。そうすると、2回目からは渡ろうとする行動を中止します。

一方では、成功した仔犬Aは、次からは更に複雑な地形の小川を渡れるようになります。こうして、成功したAはどんどん積極的な行動を示し10日間を観察した結果、その差が開く一方でした。

ところが、失敗し躊躇していたBを、成功したAと一緒に同じ小川を渡らせると、成功する確率が上がります。ここに「最初の動機づけが成功に導く」との法則のある事が言えるのです。個体AとBはそれぞれが、初夏♂2♀2・秋季♂2♀2、季節を変えて8頭が実験に参加しました。この分野には、会誌上の「お便り」でも、初心者が成功した場合、或いは、失敗した場合などの情報が沢山掲載されています。そうした報告も「動機づけ」の観点から注目してください。

こうした幾つかの経験から、最初の「動機づけ」とは、仔犬が新しい環境に出会ったその時から、飼い主は相当に慎重になる必要があります。それは飼育目的に対して、飼い主はいかなる学習が必要なのかと言う問題意識が求められています。そして、飼い主は環境を熟知して初めて目標に対して成功に導く事が出来るということを把握する必要があると思います。この分野は、言葉としてはわりあい単純ですが、飼い主は実際の場面でかなり努力が必要になるでしょう。

第2は、「狩猟する両親から生まれた犬は、必ず狩猟犬になる」と言った様な、最もらしいような、かなり乱暴な主張が根強くあります。しかも、相当に見識のある方にも、この論法が信じられていると言う、厄介な問題です。

そこで、例えば過去 100 年間の例を例に考えてみると、各地に居た日本犬たちが「狩猟の純粋種」だと理解している方は恐らくないでしょう。(日保 50 年史・会誌 30 参照) この間に、犬の見方・考え方を基準に、様々な繁殖があつての今日に至る歴史があります。

縄文柴犬は狩猟犬として「淘汰」し「改良」した犬種ではありません。縄文柴犬は縄文時代のイヌと似ており、「額は広く、額段が浅く、小級から中小級の小型の犬」という、形態学・考古学・人類学・生物学・生化学的な犬の見方を追求した結果だといえるのではないのでしょうか。まさしく、我が国に滔々と流れる人と日本犬との歴史を理解する必要があります。

では、ポインター・セッター・ビーグル……などと言う犬種は、全て狩猟犬としての能力差に、不安定な要素はないのだろうか？この説明には「最初の動機づけに特定の遺伝子が影響を与えやすい」という見解として、その一部を理解しることが必要でしょう。

私は遺伝の法則について、敢えてここで論ずる気はありません。しかし、特定の遺伝子についてのみ能力の影響に差がある、との普遍的な解釈が仮にもあるとするならば、人間は生まれながらにして能力に差があるのだから、職業の選択をする余地がない事にも、観方としてつながってしまいます。両親犬が猟をするからと言ってその子孫が必ず猟をする、との説については非常に短絡的ではないのでしょうか？その意味では、縄文柴犬の過去の分析から、どんな遺伝なのかを研究・検討する必要があるだろうと思います。

因みに、「進化論」の分野ではラマクルの(用不要説)説は現在では否定されています。ダーウィンの(自然選択説)説は、世界に 700 種の犬の変異をもたらした、と考えると(実際はそれだけではありませんが)理解しやすいと思います。また、マルクス主義では「育つ環境や社会的意識が左右するのであり、人の能力には先天的な差異がない」との理解は、生物学的には無視出来ないと言う見解も多くあります。縄文柴犬のこれからの繁殖についての考え方や、分析のあり方が問われることとなります。その意味での J S R C としての繁殖理論や検証は、まだスタートに並んだくらいで、目を覆いたくなるほど我々は未熟です。

この第2の結論として、その個体が持つ遺伝子は環境による行動に対し、適応に一定の影響を与えますが、その環境による動機づけの行動にはそれほどの差はないと言う事だと私は理解しています。

S氏も、成功した沢山の「お便りコーナー」の例、木登りや綱渡りをする・掛け声によって朝寝坊の娘を起こす、ということから共通しているのは、仔犬の時期から扱う方法が、その環境に対する「配慮」が必要なことです。良くある話では、犬を呼んでも戻って来ない場合に何故なのか？と言う問題がありますが、これは単純明快であつて「犬が嫌だ」から寄って来ない、「寄って行けば、必ずいいことがある」との「動機づけ」即ち、最初の学習が無いからでしょう。つまり、日常的な接し方について犬の側から言うと、飼い主の態度を観て学習したのであり、その反映が結果なのです。これは、犬が「悪い」と言う評価ではなく、飼い主の側の問題なのではないのでしょうか。飼育目的が、所謂、家庭犬でも狩猟犬でも、運搬と言う問題についても、全く同じ次元として共通しているように思えます。

* * *

以上、狩猟犬としての縄文柴犬について、犬との接し方の基本的な考え方を中心に、S氏の経験を材料にして私なりの考えを述べてみました。この稿では、所謂、狩猟の分野に限らず、一般家庭での犬の育て方にも共通する点に重点をおきました。

会誌 17 号の表紙になった
↓木登りや綱渡りをしたセナ



それぞれに違った環境で育てた犬が、同じ様に成長する筈は無いのです。ではあるが、人は何故か？結果だけは同じように成長した犬を求めるのです。私は、そうした考え方とは反対に、むしろ、独特の個性的で特徴のある犬に尽きぬ興味が湧き上がります。未知なる縄文柴犬の能力開花があるからです。そのためには、それぞれの環境を熟知し生かした人の英知が重要になります。縄文柴犬たちに理想を求める前に、自分たちの方が色々と学ぶ事があると思うのです。それは当分続くテーマであり、恐らく終わりもないだろうと思われまます。理想の特徴に合った縄文柴犬を常に描き続け、繁殖を続け保存すべきだと思っています。そして、一つの犬をどんなに完成したとしても、繁殖・作出がなければ「保存」になりません。ここには、狩猟犬なのか、家庭犬なのか、都会で育ったのか、山間部で育ったのか、そういう区別は全く無用な考えであり、これからも延々と続けたい分野だと思います。ここには、それぞれに育った縄文柴犬たちが、その時代や環境に適応し続ける、進化の問題も視野に置くべき事柄でしょう。

我が国に残されてきた犬は、狩猟犬とか家庭犬とか区別して繁殖をした歴史があるとは思えません。日本犬の伝統的な「性質？」と言うのは、案外、大昔からの文化を知る事から、意外な側面を知る事になるのではないのでしょうか。この拙文を掲載（1993）してから、多くの方々の励ましや触れて欲しい内容についての要望が寄せられ、個々にはご返事が出来ませんでした。この場をお借りしてお詫びと同時に、要望には不十分ながら触れたつもりですので、お許し下さい。尚、参考資料を紹介して欲しいとのご要望ですが、これまでの会報で折りに触れて紹介しておりますので、是非、参照して下さい。

5. 狩猟犬としての縄文柴犬

私事で心苦しいのですが、物心ついた頃（中国・吉林省）には、既に白毛の日本犬がいました。終戦になり引き揚げ後、長野県八ヶ岳山麓での子供時代は、隣家の狩猟犬を見たり触れたり狩猟の話を聞いたりして、関心を持っていました。そうした、子供の頃に理解したイメージがあり、自ら積極的に狩猟犬に関する事には触れませんでした。狩猟については、何時も一方的に聞く側であったし、狩猟に関する文章を読む事はあっても、感想を述べる事はありませんでした。その私の考えの底辺には、ごく普通の家庭犬が山へ行けば狩猟犬でもある、という環境が、少年時代には毎日のように見聞き体験しているからです。漠然とではあるが「運搬」とか「猟欲」とか特別に訓練したのが猟犬だという考えは、違うのではないかとその印象は大人になる最近まで内在していました。

長年この縄文柴犬と接しつつ学んだことは、飼い主が犬と一緒に暮らす関係の中で、必要に応じて狩猟もするが番犬もするのです。ここが「協働」とする由縁です。家族の一員として暮らし縄文柴犬も家族に良く溶け込むのです。こうした理解がありましたから、「訓練した特別な犬」とは一線を画す様になっていました。

伝統としての日本犬については大変に奥が深いものの、その中でどうしても一つ挙げるなら「性質（系統）」の考え方があります。性質とか系統の選択となれば、繁殖や作出と言う問題になります。次に挙げるのは、所謂、犬の生育環境とか学習であり、仔犬からの育て方と言う分野があります。この二つの側面は、大変に重要な関係にあります。その結果として、これまでの多くは犬の「能力」とか「猟欲」、例えば、10羽捕るのと1羽しか捕らない、と言う個体の評価や考え方があるように思えました。

こうした、性質・系統としての選抜による繁殖と言った分野と、犬の育て方と言った内容について、繰り返し・繰り返し過去に討論もしましたし、それなりの蓄積もあり、所謂「縄文柴犬の見方」があります。（2012 縄文柴犬ノート）

秋田県内でも武藤鉄城（1896～1956）が、角館や桧木内・田沢湖・羽後・阿仁合・百宅、ほか各地のマタギ調査や、「狼の伝承と狼狩記録」など貴重な記録を残しています。

直良信夫 1968「狩猟」があります。直良先生は「あらっばい記述の中から、狩猟がどのように、日本人の暮らしの裡に生かされたかをつかんでいただければ・・・」とあります。

千葉徳爾 1975「狩猟伝承」では「直良先生の最後の章をひきのぼしたようなもの・・・」と述べて、平安朝以降に重点がおかれた内容になっています。しかし、これだけでは終わらないのです。

千葉徳爾 1969－1990「狩猟伝承研究」（風間書房・5巻書名は省略）がある。

根深誠 2014「白神山地マタギ伝－鈴木忠勝の生涯」の中に「イヌは何のために連れてゆくのですか」の著者の質問があり、マタギの鈴木忠勝は「主にクマの穴探しだナ、人は気づかなくてもイヌは嗅ぎ分ける・・・」とあります。

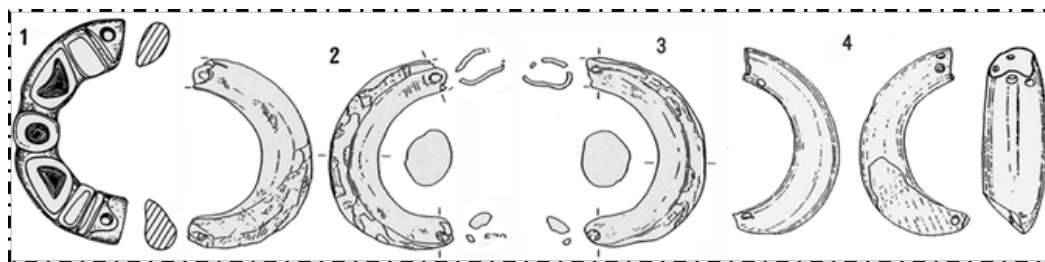
最後に、狩猟については、考古学の金子浩昌先生に、2015年の会誌 25・26・27に寄稿していただきました。少し長くなりますが、とても貴重なことをまとめていただいておりますので、以下に引用させていただきますこの稿を終えます。

『縄文人の狩猟は、イノシシ、シカ、ときにクマ、カモシカなどの大形獣、ごく稀にオオカミの遺骸の出土することもあります。オオカミが実際あったかは疑問です。ニホンザル、タヌキ、キツネ、テン、ノウサギ、そして今は姿を消したカワウソなどの中形獣、ムササビなどもみます。手近なものでキジ猟一骨からだとヤマドリとの区別が一寸難しいのですが、湖沼、河川、海辺での水鳥猟は種類が多彩ですから、捕獲活動も多様だったでしょう。深い山間地帯、開けた丘陵地帯という縄文人の生活した環境にも違いがあったと思います。獲物の棲息の多寡も地域によって違いそうです。愛犬とともに山野、水辺を歩く縄文人を想像できますし、2乃至3の部落の人々が集い、巻狩りを試みる姿も考えられます。そして道具には丸木のままの弓を持つ人もいるし、漆を塗った飾り弓を使う人も一つ集落の中にいたことは間違いないようです。猟の指導者的立場にある人の獲物に対しての畏敬の念の現れなのかもしれません。

個人的な猟が先ずあって、条件によって人々が集うようになっていったのではないのでしょうか。個人の働きは何といっても基本になるのでしょうか。それに何より愛犬との付き合いがあります。お互いが信頼し合った仲でした。イノシシに近寄り過ぎ牙にかけられたり、はね飛ばされて足を骨折した犬を大切に飼っていた例があります。

なお時期的な違いのあるのも当然だと思います。出土する動物遺体の数が時代のちがう遺跡によって異なることはごく普通です。一つ集落のなかで、動物遺体の特に集中する場所が幾つかあるということも、縄文時代の早期には知られています。そのような場所から出土する動物遺体を調べてみると、1個体がまとまっているということは先ずなく、頭蓋や下顎骨の左右いずれか、四肢骨も左右いずれか、道具や飾りとして使う部分ははずされています。狩りに協力した人々が分け合っているのでしょう。一つの遺跡内では、どうしても見つからない部分もあります。離れた場所の人々のところに持っていったのでしょう。もちろん、それと逆のこともあるわけで、離れた場所から運び込まれた捕獲物もあったようです。そして、一つの遺跡の存続していた長さを考えると、年間の捕獲量は、数頭か、仲間からの分かち合いを加えても、ごく少ないものであったと思うのです。

ということは、狩猟ということがとても大変なことだった。あちこちに棲む人が情報を集め合って狩りが行われ、分け合ったのです。技術的にも容易なことではなかったでしょう。』



- 1：布瀬の腕輪（柏市布瀬貝塚）82 mm
- 2：歯牙製垂飾・イノシシ上犬歯 72 mm
- 3：イノシシ上顎犬歯（千葉市有吉北貝塚）
- 4：歯牙製垂飾・イノシシ上顎歯牙 70 mm（千葉市草刈貝塚）